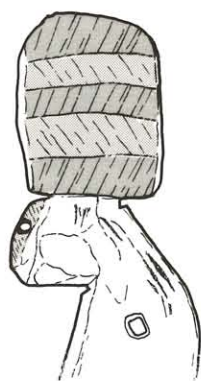

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

紀要

2002



2004年2月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター



〔表紙〕鹿田遺跡第7次調査
猿形木製品のスケッチ
鎌倉時代末～室町時代
〔裏表紙〕津島岡大遺跡第10次調査
細頸壺、弥生時代後期

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要

2002

2004年2月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

2002（平成14）年度には、津島地区の創立五十周年記念館、自然科学系総合研究棟、農学部共同溝、鹿田地区の総合教育研究棟のそれぞれ建設地において発掘調査を実施しました。おおむね年度を通じて発掘調査がつづき、2つの現場が重なる場合もあったのですが、事故なく発掘作業を遂行できたことはまことに幸いでした。

創立五十周年記念館建設地においては、弥生時代前期の水田遺構や中世の条里制にかかわる遺構等が発見されたほか、縄文時代後期に属するやや規模の大きい焼け土遺構を確認することができました。津島地区の縄文時代遺跡については、旧河道の岸辺に設けられた堅果類貯蔵穴の調査などで多くの資料が蓄積され、全国的にも注目をあびています。しかし、西日本の一般的な傾向とはいえ、ドングリ類を食べたはずの人間の集落のあり方がまだ十分に明らかにされていないのが実状です。今回発見の焼け土遺構は、たんなる焚き火跡というよりもう少し複雑な構造物に関係したもののようですが、こうした調査により岡山平野の縄文文化がいつそう明らかになることが期待されるところです。

鹿田地区の総合教育研究棟建設地では、弥生時代以降の多くの文化層を調査しましたが、とりわけ弥生時代末期から古墳時代初頭に属する土器を多量に廃棄した「土器溜まり」の調査は、食生活ばかりでなく当時の祭祀や生業にかかわる内容も判明し、重要な意義がありました。

充実した調査がつづいた反面、調査成果の整理や報告書作成の作業にはどうしても影響がでざるをえないのですが、さいわい本年度は、現場の繁忙にかかわらず2冊の調査報告書を刊行することができました。また「キャンパス発掘成果展」では、見学者が土器の接合をおこなったり模造石器でさまざまな作業を体験できるように工夫し、とくに小・中学生や親子連れの参加者から好評を得ました。

発掘調査の多さや報告書の刊行で多忙な年度ではありましたが、事務局および関係部局からは常にご理解とご支援をいただくことができました。また本紀要には、小西猛朗・元九州大学教授から鹿田遺跡出土の炭化穀粒に関してご寄稿をいただきました。関係各位にあらためて厚く御礼もうしあげる次第です。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター長

稲田孝司

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002

目 次

第1章 津島岡大遺跡の調査研究

第1節	発掘調査の概要	1
1.	津島岡大遺跡第27次調査（創立五十周年記念館）	（高田浩司） 1
2.	津島岡大遺跡第28次調査（自然科学系総合研究棟）	（忽那敬三） 4
3.	津島岡大遺跡第29次調査（農学部共同溝）	（光本 順） 7
第2節	試掘・確認調査の概要	11
	事務局旧本部棟移転に伴う試掘・確認調査	（光本） 11
第3節	立会調査の概要	13
	事務局本部棟・創立五十周年記念館新営に伴う立会調査	（忽那） 18

第2章 鹿田遺跡の調査研究

第1節	発掘調査の概要	26
	鹿田遺跡第13次調査（総合教育研究棟）	（光本） 26
第2節	立会調査の概要	29
	エネルギーセンター棟周辺外構工事に伴う立会調査	（野崎貴博） 29
第3節	鹿田遺跡の研究	32
1.	鹿田遺跡の弥生時代終末から古墳時代初頭の集落について	（光本） 32
2.	鹿田遺跡第5次調査土壙15から出土した炭化穀粒について	（元九州大学教授 小西猛朗） 35

第3章 調査資料の整理・研究と展示・公開

第1節	調査資料の整理・研究	47
1.	調査資料の整理・分析	47
(1)	出土遺物のレントゲン撮影について	（岩崎志保） 47
(2)	今年度の調査資料の整理	（岩崎） 49
2.	出土資料の保存処理	50
(1)	岡山大学における保存処理後遺物の現状と課題	（財元興寺文化財研究所 藤田浩明・伊藤健司） 50
(2)	今年度の保存処理	A. 保存処理後遺物の管理状況の改善について（忽那） 54
	B. 今年度の保存処理作業	（忽那） 55
第2節	調査成果の展示・公開	（岩崎） 55
第3節	2002年度調査研究員の個別研究活動	57
1.	科学研究費採択状況 2. 論文・資料報告 3. 研究発表等 4. 資料収集・実態調査	57

第4章 2002年度における調査・研究活動のまとめ

（光本） 58

付 編

	日本測地系から世界測地系への移行に伴う構内座標の変更について	（光本） 59
	岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項	60
1.	岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程	60
2.	2002年度埋蔵文化財調査研究センター組織	62
3.	2002年度審議・決定事項	63
4.	岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項	63

付 表

65

挿 図 目 次

図1	第27次調査地点位置図	1	図25	第3地点出土遺物(3)〈石器〉	22
図2	第27次調査土層断面図	2	図26	第13次調査地点位置図	26
図3	第27次調査遺構全体図	2	図27	第13次調査土層断面図	27
図4	第28次調査地点位置図	4	図28	第13次調査遺構全体図	27
図5	第28次調査土層断面図	5	図29	第12次調査地点で検出した中世の遺構との 位置関係	30
図6	第28次調査遺構全体図	6	図30	44ライン以西の遺構詳細図	31
図7	第29次調査地点位置図	7	図31	P1平・断面図	31
図8	第29次調査南壁土層断面図	9	図32	P2平・断面図	31
図9	第29次調査検出遺構全体図	10	図33	基本土層・P3断面図	31
図10	溝1～3、ピット1	10	図34	井戸平・断面図	31
図11	溝1～3	10	図35	鹿田遺跡の弥生時代終末から古墳時代初頭 の遺構全体図	33
図12	溝2	10	図36	試料別に示した米の粒長の変異	37
図13	ピット1	10	図37	試料別に示した米の粒形指数の変異	38
図14	包含層出土遺物	11	図38	奈良時代～江戸時代の炭化米の粒長と粒幅 の関係	39
図15	試掘・確認調査地点位置図	12	図39	試料別に示した大麦の粒長の変異	39
図16	試掘・確認調査東壁土層断面図	12	図40	試料別に示した大麦の粒幅の変異	41
図17	津島地区全体図	13	図41	弥生前期～中世の炭化大麦の粒長と粒幅の関係	42
図18	今年度の調査地点(1)津島地区	15	図42	2002年7月の湿度変化	54
図19	今年度の調査地点(2)鹿田地区	17	図43	展示会のポスター	56
図20	事務局本部棟・創立五十周年記念館新営に 伴う立会調査地点	18	図44	日別入場者数	56
図21	土層柱状図	19	図45	入場者の男女別割合	56
図22-1	土層柱状図位置及び検出遺構平面図	20	図46	2001年度までの調査地点(1)津島地区	75
-2	第1地点出土遺構平面図	20	図47	2001年度までの調査地点(2)鹿田地区	77
-3	溝2～5遺構断面図	20	図48	1998年度までの調査地点三朝地区	78
図23	第3地点出土遺物(1)〈土器〉	21			
図24	第3地点出土遺物(2)〈土器〉	22			

写 真 目 次

写真1	6層出土瑪瑙製勾玉	6	写真12	棒火矢のレントゲン写真(側面)	47
写真2	溝1・2プラン	9	写真13	銅片の現状	48
写真3	溝2セクション	10	写真14	銅片のレントゲン写真	48
写真4	溝3セクション	10	写真15	鉄製摘鎌の現状	48
写真5	石鏃	11	写真16	鉄製摘鎌のレントゲン写真	48
写真6	溝5底面検出状況	20	写真17	収蔵状況	50
写真7	2002年度事務局・創立五十周年記念館周 辺立会調査出土遺物	23	写真18	復元部の白色粉体	51
写真8	鹿田遺跡第5次調査土壙15で出土した炭化物	35	写真19	斎串収蔵状況	51
写真9	鹿田遺跡第5次調査土壙15で出土した炭 化穀粒	45	写真20	収蔵室	51
写真10	棒火矢の現状	47	写真21	小展示室	51
写真11	棒火矢のレントゲン写真(正面)	47	写真22	展示状況	52
			写真23	アンペラ展示状況	52
			写真24	処置後の状況	54

目 次

表 1	2002年度調査一覧	14	表11	図41に示した炭化大麦出土遺跡一覧	42
表 2	鹿田遺跡の弥生時代終末から古墳時代初頭の遺構一覧	33	表12	2002年度室内作業一覧	49
表 3	炭化穀粒と夾雑物との割合	36	表13	第5・6期木器保存処理工程	55
表 4	出土した炭化米および玄米の粒長の比較	36	表14	2001年度以前の木器保存処理工程	55
表 5	出土した炭化米および玄米の粒幅の比較	37	表15	新旧構内座標の対照	59
表 6	出土した炭化米および玄米の粒形指数の比較	38	付表 1	1982年度以前の構内主要調査 (1980~1982年度)	65
表 7	出土した炭化大麦粒の皮麦と裸麦の割合	39	付表 2	2001年度以前の構内主要調査 (1983~2001年度)	65
表 8	出土した炭化大麦および玄麦の粒長の比較	40	付表 3	埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要	71
表 9	出土した炭化大麦および玄麦の粒幅の比較	40	付表 4	埋蔵文化財調査室刊行物	73
表10	出土した炭化大麦および玄麦の粒形指数の比較	41	付表 5	埋蔵文化財調査研究センター刊行物	73

例 言

- 1 本紀要は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが岡山大学構内において2002年4月1日から2003年3月31日までに実施した埋蔵文化財の調査研究成果、及びセンターの活動についてまとめたものである。
- 2 紀要の作成に際して、炭化穀粒に関して小西猛朗氏（元九州大学教授）、出土資料の保存処理に関して藤田浩明氏・伊藤健司氏（財団法人元興寺文化財研究所）から玉稿をいただいた。
- 3 本文は岩崎志保・忽那敬三・高田浩司・野崎貴博・光本順が分担執筆し、執筆者名を末尾に記した。
- 4 編集は、稲田孝司センター長と山本悦世調査研究室長の指導のもとに、光本順が担当した。

凡 例

- 1 大学構内の埋蔵文化財の調査に関しては、平成14年（2002年）4月1日より施行された「測量法及び水路業務法の一部を改正する法律」に基づき、世界測地系を採用し、新たに構内座標を次のように定めている。なお、従来の日本測地系に基づく構内座標と新規の構内座標との関係については、付編（59頁）において述べている。
 - 1）津島地区では、国土座標第V座標系（ $X = -144,156.4617\text{m}$ 、 $Y = -37,246.7496\text{m}$ ）を起点とし、真北を基軸とした構内座標を設定した。一辺50mの方形区画である。また同地区では調査の便宜上、大きく津島北地区と同南地区に二分する（図17）。
 - 2）鹿田地区では、国土座標第V座標系（ $X = -149,456.3718\text{m}$ 、 $Y = -37,646.7700\text{m}$ ）を起点とし、座標軸を $N-15^\circ-E$ に振ったものを基軸とした構内座標を設定した。地区割は一辺5mの方形を基準としている。
 - 3）本文中で用いる方位は、津島地区・鹿田地区は国土座標系の座標北を、他は磁北を用いている。
- 2 岡山大学構内の遺跡の名称は、周知の遺跡の場合はそのまま踏襲する。三朝地区の発掘調査地点は小字名をとり「福呂遺跡」と呼称する。他地区は任意の名称で仮称する。
- 3 調査名称は、「発掘調査」に分類したものについては、各遺跡毎に調査順に従って次数番号で呼称し、「試掘・確認調査」「立会調査」に分類したものについては、任意の名称を用いる。発掘調査のうち、小規模で、確認調査から連続して調査したものは、「試掘・確認調査」に分類する。
- 4 「発掘調査」についての記述は、「第1章第1節3. 津島岡大遺跡第29次調査」を除き、現段階における概要であり、詳細は正式報告によっていただきたい。「津島岡大遺跡第29次調査」については、本紀要での記述を正式報告にかえる。
- 5 表に記載した所属部は、原則として各学部の頭文字を略号として用いている。
- 6 付表2に掲載する調査一覧については、中世層まで掘削したものを対象とし、その他については除外した。未掲載のデータについては、当センターにおいて管理している。
- 7 本文・目次・挿図・写真などで使用の調査番号は表と一致する。
- 8 本紀要に掲載の地形図（図17）は、岡山市域図を複製したものである。